

巻 頭 言

本研究所令和2年度の紀要『言語と文化』第33号をお届けします。

本号には研究論文2篇、報告2篇、資料1篇を掲載しています。まずは、投稿して下さった方々、そしてご多忙の中貴重な時間をさいて査読に協力してくださった方々には心より厚く御礼を申し上げます。

2020年は新型コロナウイルスが猛威を振るった一年でした。新型コロナウイルスは経済を直撃し、人々の生活を変えてしまっただけでなく、教育活動や研究活動にも深刻なダメージを与えました。本研究所も大きな影響を受けました。30年以上続けてきた本研究所恒例の年間行事である夏期公開講座の中止は余儀なくされました。計画していた国際共同研究でも海外からの研究者を迎えることを断念せざるを得ませんでした。秋以降、試行錯誤の末、オンライン形式で異文化体験講演会を1回、研究例会を2回開催するなど、下半期の行事を計画通りにこなしましたが、年間目標の全ての達成はできませんでした。

来ない春がないと言われるように、新型コロナウイルスが猛威を振るう厳冬が過ぎ去り、いつもの春がきつとやってくることを信じています。暦の上で春の到来を告げるのは立春です。伝統的な陰暦では2021（辛丑）年は「年内立春」で、春を待ちわびる人々の気持ちを察したかのように、立春（2月3日）が春節（2月12日）よりも早く到来しました。

「年内立春」といえば、『古今和歌集』巻頭一番歌「年の内に春はきにけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ」（在原元方）がよく知られています。この歌は早くから中国に紹介され、中国の人々によって詠まれていました。1592年の識語をもつ明代の『（全浙兵制考附）日本風土記』では、この歌は、「獨世那屋之尼 發而外氣尼結里 許多獨世和 箇所多也以外奴 箇獨世多也以外奴」と漢字で音訳して詠まれ、その意味は「年内立春 已一年別 算旧年節 当今年節」と訳されていました。

春を敏感に感じ、その到来を心待ちにすることは世の東西を問わず人々が広く共有する気持ちです。一日も早く新型コロナウイルスが終息し、いつもの春が到来することを切に願いたいものです。

辛丑年立春

言語文化研究所
所長 蔣 垂 東

